

目次

序 章 テニスの醍醐味とは何か

結果に一喜一憂するだけではもったいない

テレビ解説ではすべてを説明し切れない

「ナダルはなぜクレーで強いのか」を知りたければ

フェデラーのスーパーショットをお膳立て

誰にも頼らずひとりで戦う選手の頭の中に何があるのか

第一章 この選手のここを見よ

—— 錦織、フェデラー、ナダル、ジョコビッチ ——

全国小学生選手権大会で「遊んで」いた錦織少年

プロデビュー戦のダブルスで対戦

テニスの世界では「トップ一〇〇」に入るだけでも一流選手

錦織はなぜファイナルセットに強いのか

「バックハンドのクロスの打ち合い」がラリーの基本

錦織はスライスも含めたバックハンドの総合力が高い

じつはバックハンドより不安定になりやすいフォアハンド

グリップの「厚い」選手の強みと弱点

全仏と全英の連続優勝が難しい理由

なぜサーブ&ボレーの選手が急減したのか

フェデラーがああ年齢でも戦えるのは「走り方」にも秘密がある

クレイコートではトップスピンの有効

ナダルが強いのは「左利き」だから

いままも進歩し続けるフェデラーとナダルの偉大さ

どのサーフェスでも満遍なく勝つジョコビッチ

不調でも執念深く戦うジョコビッチのずる賢さ

錦織の連敗記録はいつストップするののか

錦織がジョコビッチに勝つ方法

第二章 選手たちはどんな環境で戦っているのか

いまのATPツアーはかつてないほどハイレベルで豪華
ランキングはどのように決まるのか

グランドスラムは一回戦敗退でも賞金五〇〇万円以上

テニスは「自然環境との戦い」でもある

サーブのトスは高く上げても何もいけない

同じ大会でも同じ環境のコートはひとつもない

メーカーによってボールの質も違う

サーブ前のボールの選び方

ストリングの進化

ウェアの着替えをめぐる事情

ドリンクと補給食

第三章

この「駆け引き」に注目すると試合は何倍も面白い

コイントスに勝って「レシーブ」を選ぶのはなぜか

試合前五分間のウォーミングアップは最高の「お手本」

ファーストサーブは「成功率」より「ポイント取得率」が大事

効果的なセカンドサーブを打てるのが本当にサーブのいい選手

サーブのコースと球種の選択

安全重視のクロスの打ち合いからどちらが先に仕掛けるか

フォアの回り込みショットは相手にプレッシャーがかかる

コート上では意地悪でずる賢くないと勝てない

失敗しても意味のあるドロップショットもある

相手をしっかり騙すのがいいドロップショット

試合全体を見据えた駆け引き

序盤の探り合いで「エサ」をまいておく

捨てるポイントやゲームをうまくつくれるのがいい選手の条件

終章

ヒリヒリする勝負は「0-30」から始まる

ブレイクポイントが一〇回あっても取れなければ相手のペース
突如サーブ&ボレーを始めて流れを変えた錦織

時間を奪うプレー、時間をつくるプレー

後ろに下がったからといって消極的なわけではない

リオ五輪三位決定戦のトイレット・ブレイク騒動

日没サスペンデッドで流れが変わった伊達×グラフ戦

修羅場をくぐった経験が「強いメンタル」の源泉

テレビ中継は副音声でも観戦してみよう

デビスカップで日本が優勝する日

ワールドグループ進出の難しさ

過酷だったアウェイ戦の思い出

ニュージージーランド対策で人工芝コートをクリックコートに改造

デ杯はなぜ「やってみなければわからない」のか

ダブルスをどう戦うか

テニスの団体戦におけるチームワークとは

テニス文化の成熟が日本を強くする

あとがき

序章

テニスの醍醐だいごみ味とは何か

結果に一喜一憂するだけではもったいない

錦織圭にしこりけい選手や大坂なおみ選手らの活躍もあって、ここ数年のあいだに、テニス人気は急上昇しました。学校の部活や地域のクラブなどでテニスをプレーする人たちは昔から数多くいましたが、いまはそれに加えて「見るスポーツ」としても多くのファンを得ています。衛星放送やネット配信などで、海外の試合がいつでも見られるようになったのもその一因でしょう。メディアの注目度も高まり、錦織や大坂の試合がニュース番組やワイドショーなどで大きく取り上げられることも増えました。長くテニスに関わってきた僕のような人間にとって、これは大変喜ばしいことであると同時に、大きなチャンスでもあります。

テニスを見る人が増えたなら、「もっとテニスのことを知りたい」と思う人も増えていくでしょう。僕としても、せっかく多くの人々がテニスに興味を持ってくれているのだから、もっとこのスポーツのことを深く知って、いまの何倍も楽しんでもらいたい。いまは、テニスに対する理解を深めてもらうチャンスなのです。テニスという文化を社会に定着させるチャンスだともいえるでしょう。

たとえば錦織の試合を見ると、みなさんはどこに注目しているでしょうか。彼を応援するファンの多くは、ひとつひとつのプレーや試合の「結果」ばかり気にしているだろうと思います。錦織のファーストサーブが入るかどうかが、微妙なところに落としたドロップショットに相手が追いつくかどうか、やっとなんだブレイクポイントやセットポイントを取れるかどうか、そして、この試合に勝てるかどうか——ハラハラドキドキしながら、それらの結果に一喜一憂するわけです。

もちろん、それがスポーツ観戦の楽しさのひとつでしょう。手に汗を握って「応援する選手に勝ってほしい」「いいプレーや勝利をいっしょに喜びたい」と願う気持ちを否定するつもりはありません。

でも、それだけではもったいない。結果だけではなく、プロセスを見て「なぜそうなったのか」を考えるようになると、テニス観戦はまったく違うものになります。ひとつのポイント、ひとつの試合から得られるものが、格段に増えるでしょう。ただ「勝ったからうれしい」「負けたから悔しい」で終わらずに、選手のプレーや試合の内容について考え、みんなでそれを語り合う。そんなテニスファンを、僕は日本でもっと増やしたいのです。

テレビ解説ではすべてを説明し切れない

以前、僕がWOWOWの解説を担当した錦織の試合で、こんなシーンがありました。相手は若手の成長株であるステファノス・チチパス（ギリシヤ）。錦織のファーストサーブがフォルトとなり、セカンドサーブになりました。

錦織の試合をよく見ている人なら、ちょっと心配になるところでしょう。甘いセカンドサーブを相手に思い切り打ち返されてポイントを失うシーンが記憶にあるからです。

実際、錦織の緩いセカンドサーブはコートの中の浅いところでバウンドし、ファンはヒヤリとしました。ところが、チチパスがフォアハンドで強く叩いたボールはネット。凡ミスをしてくれて「助かった」と思った人が多いと思います。でも、僕はこうコメントしました。「錦織は最高の縦回転をかけましたね。すばらしいセカンドサーブです」

縦回転、つまりボールの進行方向に錦織が強いスピンをかけたことで変化が付き、そのせいでチチパスはリターンを打ち損じた。単なる凡ミスではなく、錦織がサーブを工夫することで相手のミスを引き出したわけです。

プレーの結果だけ見ればたしかにチチパスのミスですし、記録上も「アンフォースト・エラー（自分に原因があるミスショット）」としてカウントされるでしょう。しかし実質的には、錦織が自らの技術と戦術によってもぎ取ったポイントだと僕は思いました。

結果だけに一喜一憂していると、こういうプレーの面白さは見えてきません。もちろん、その意味を理解するには「同じサーブにもいろいろ異なる球種がある」「浅いボールがみんな打ち返しやすいわけではない」といった知識も必要でしょう。それを視聴者にお伝えするのが、解説者の役目です。だから僕も、先ほど紹介したようなコメントをしました。

その場面だけではありません。選手たちが何を考え、なぜそのプレーを選択し、それがどのような結果につながったのか。解説をするときはいつも、あまり感情的にならず、冷静にプレーを分析することを心がけています。

とはいえ、生中継の放送中にすべてを説明することはできません。テニス中継の解説者は、ひとつのポイントが終わって次のサーブが始まるまでの短い時間で簡潔に喋るしゃべることが求められます。そこで話せる中身には、どうしても限界がある。「もうちょっと詳しく説明したい」と思うこともしばしばです。だから、こうして本という形で、テニスの見方や

考え方をお話しすることにしました。

「ナダルはなぜクレールで強いのか」を知りたければ

テニスはシンプルなスポーツですから、そんなに難しい話にはなりません。技術や戦術、選手のプレースタイル、試合での駆け引きなど、ちよつとした基礎知識を仕入れておくだけで、テニス観戦はこれまでに以上に楽しくなるはずです。

たとえば、いわゆる「ビッグ3」のひとりであるラファエル・ナダル（スペイン）がクレールコートで無類の強さを誇っていることは、テニスファンなら誰でも知っているでしょう。グランドスラム大会で唯一クレールコートを使用する全仏オープンで、ナダルは（二〇一九年までに）一二回も優勝しています。ほかのグランドスラム三大会（全豪、全英、全米）の優勝回数は合わせて七回ですから（それだけでも十分にすごいのですが）、この「結果」を見ればクレールでの圧倒的な強さは誰の目にも明らかです。

では、ナダルはどうしてクレールで強いのでしょうか。

結果を見れば強いのはわかりますが、それだけでは理由はわかりません。ナダルの強さ

の秘密を知るには、まずテニスそのものを知る必要があります。

グラス（芝）コート、ハードコート、そしてクレイ（土）コートと、さまざまなサーフェス（コートの表面）があるのは、テニスの大きな特徴のひとつでしょう。こんなに多様なサーフェスがある競技はほかにありません。

それぞれのサーフェスは、ボールのスピードや弾み方、フットワークなどに与える影響が異なります。当然、選手によって向き不向きがある。したがって、まずはサーフェスの違いを理解しなければいけません。その上で、ナダルのプレースタイルとクレイコートがなぜ相性がいいのかという話になるのです。

では、ナダルのプレースタイルとはどういうものなのか。それを知るには、フォアハンドとバックハンドの違い、右利きと左利きの違い、スピンをかけたボールの動き、クロスとストレートの違い……などなど、技術や戦術についての基礎知識が欠かせません。それを身につけて初めて、ナダルの強さを説明することができますのです。

ナダルについてはのちほど詳しく解説しますが、その強さの理由がわかれば、「どうすればクレイでナダルに勝てるか」を考えることもできるでしょう。もちろん、そんなに簡

単に勝つ方法が見つかれば誰も苦勞しません。でも、自分なりにそれを考えてみれば、実際にクレイコートでナダルと対戦している選手が「いま何を考えているか」を想像できるようなものなると思います。すると、次のプレーや試合展開などを予想することもできる。それだけ、観戦するときの楽しみの幅が広がるわけです。

錦織の試合も同じこと。彼がどんなプレーを得意としているのか、強みはどこなのかを理解すれば、相手の選手が何をしようとするかを考えられるようになるでしょう。単に「錦織がんばれ！」と応援するだけでなく、逆に「どうすれば錦織を倒せるか」を考えてみるのも面白いかもしれません。

少なくとも僕は、解説をするときにそういう視点から考えて話をします。そうすることで、その試合の勝負を分けるポイントが見えてくるからです。結果的に錦織が勝ったのなら、その試合では彼の何がよかったのか。錦織が負けたのなら、相手の何がよかったのか。ファンは解説者でも評論家でもないのです、勝因や敗因について正解を出す必要はありません。しかしそれを考えることで、好きな選手のことをより理解できるようになりますし、試合も味わい深いものになるでしょう。せっかくテニスを見るなら、そういうところまで踏み

込んで考えたほうが面白いのではないでしょうか。

フェデラーのスーパーショットをお膳立て

そこで忘れてはいけないのは、テニスは「相手」のいるスポーツだということ。「そんなの当たり前じゃないか」と思われるかもしれませんが、人は意外とその「当たり前」を意識しないもの。熱心なファンほど、応援する選手のプレーにばかり注目して「今日は調子がいい」「ミスが多い」などと思いやすいのです。

でも、ひとりで演じるフィギュアスケートや体操などのような競技とは違い、テニスの質はその選手の調子だけで決まるわけではありません。試合は、ネットをはさんで対峙するふたり（ダブルスなら四人）がいっしょにつくり上げています。いわば、対戦相手との「コラボ作品」のようなものでしょうか。

それこそ先ほど紹介したチチパスのリターンミスも彼ひとりのプレーではなく、それを引き出した錦織の巧みなセカンドサーブがありました。驚くようなスーパーショットの多くも、打った選手だけのお手柄ではありません。相手がいいショットを打ったからこそ、

そのピンチをチャンスに変えるようなすばらしいショットが飛び出すのです。

ここでひとつ自慢話(?)をしておきましょう。僕は昔、ロジャー・フェデラー(スイス)との試合で、ものすごいスーパーショットを食らったことがあります。二〇〇五年の全豪オープン二回戦、第二セット4-4で迎えた僕のサービスゲーム。結果的にブレイクされてしまったのですが、その最後のショットに驚かされました。ネットの外側からググッと曲がって入ってくる「ポール回し」を、見事に決められてしまったのです。

まるでマンガのような大技ですから、スタンドの観客は大喜び。フェデラー自身も人差し指を立てて雄叫びおたけを上げ、思い切りガッツポーズをしました。あんなプレーを見せられたら、僕も苦笑いするしかありません。

でも、ただ悔しいだけではありませんでした。その前に僕がネットプレーで打ったのは、ライン際ギリギリに落ちるボレーショットです。そのボールが厳しいコースだったからこそ、フェデラーは半ば強引にポール回しにトライせざるを得なかった。もちろんそれを成功させたのはフェデラーの高い技術ですが、スーパーショットのお膳立てをしたのは僕です。その意味では、フェデラーとふたりでつくった名場面といえなくもありません。だか

ら、観客の拍手の何%かは自分に向けられているような満足感がありました。

誰にも頼らずひとりで戦う選手の頭の中に何があるのか

昔話はともかく、テニスのショットは（サーブ以外は）すべて相手のショットに対するリアクションです。相手の存在なしに自分のプレーはあり得ません。だから試合中は常にネットをはさんで激しい駆け引きがくり広げられています。しかもテニス is 基本的に、試合中に誰からもアドバイスを受けられません。ベンチに監督が陣取るデビスカップや、途中でオン・コート・コーチングが認められる女子のWTAツアーなどの例外を除いて、コートからの指示や作戦タイムなどは一切なし。選手はいったんコートに入ったら試合終了までたつたひとりで戦います。こういうスポーツはほかにあまりないでしょう。

そして僕は、そこがテニスのいちばん面白いところだと思っています。誰にも頼ることなく、自分ひとりで考えてプレーする選手同士が、一打ごとに「次に何をするか」を瞬時に判断しながら試合を進めていく。その駆け引きこそが、テニスの醍醐味です。

そこに時間制限がないことも、テニスの面白さでしょう。所定の時間が過ぎれば試合が

終わるサッカーのような競技なら、いったんリードを奪ったチームが、相手にプレーをさせずに時間稼ぎをして試合を終わらせることもできます。しかしテニスはそうはいきません。マッチポイントを迎えても、自分が何らかの形でポイントを取らなければ試合は終わらない。ひとつひとつのゲームやセットも、相手にふたつのポイント差をつけなければいつまでも続きます。ゲームカウントが6-6になればタイブレークになりますが、それも二ポイント差がつくまで決着はつきません。いつ終わるかわからないのがテニスです。

ですから選手は、誰からもアドバイスを受けず、ひとり最後まで「次のポイント」を取るために考え続けなければいけません。だからテニスの試合には、マッチポイントを取り切るまで油断のできない緊張感が張り詰めているのです。

コートの上では、そんな緊張感の中で、流れが行ったり来たりします。流れが悪くなれば、選手はそれを引き戻すために何か手を打たなければいけない。相手もそうはさせまいといろいろなことを考える。強気になることもあれば、弱気になることもあるでしょう。そういう選手の頭の中を想像しながら、テニスを見てもらいたい。そのために必要な知識をこの本から得ていただけたら、うれしく思います。